

「ヨソ者」の運動の模索——釜ヶ崎で生活して

自分の抱えた問題性を釜ヶ崎労働者に提出し、向かい合うことで、はじめて釜ヶ崎の問題性が共有できるのであり、「ヨソ者」の運動が可能となる

岩田秀一

一枚のポスター

「木枯しが

故郷の便りを

乗せてきた

一人ぼっちの

俺らが

夢とのぞみを

捨てないで

朝日に向かって

歩むのさ

にしなりけいさつ」

「ドヤビルが林立する。その一つホテルABCの屋上に一人の労働者が上がり、赤く夕陽

に染まった地平線を見つめている。その労働者の脳裏に浮かぶのは白く雪の積った故郷の山脈……」

そんなポスターを手に入れた。友達のアパートの近くにある広報紙に張り出してあったのを失敬し、僕の部屋のアクセサリーにさせてもらっている。少々白々しかったので破り捨てようかと思つたが、立派？な奴なので資料にとでも思った次第。

そんなポスターが張り出される頃、ここ釜ヶ崎は冬を迎える。釜ヶ崎の冬は永く、キビしい。仕事の少ない朝の寄場（就労場所）は、労働者のいらだちがうず巻き、私服刑事の姿が目立つ。組合は冬期一時金闘争に頭を悩ま

せ、地域活動家は〈越冬対策〉に奔走する。労働者の生活が不安定な状態におとしいられる時、ここを所轄するマンモス警察西成署が、こんなポスターを張り出す意図は容易に想像できる。

労働者が、もしこのポスターに目を奪われるとするなら、何をその胸中に抱いてのことだろうか。明日の生活さえ保障されない冬の釜ヶ崎で、「明日に向かって歩め！」と言われたところでどうしようもない。もし、その労働者の釜ヶ崎に来るにいたった経緯の中に〈美しい山脈〉があり、それがたなの〈美しい出〉でしかないと思えば、いたたまれぬものを覚えるかもしれない。



では、ここを運動の場としている活動家は、何を感じるだろうか。ある者は冷静に〈警察の治安対策としてのおしきせがましいお説教〉と分析するだろう。僕をも含めた活動家（自分で〈活動家〉とは名乗りたくないが）は、確かに釜ヶ崎労働者であるだろう。しかし、たった一枚のポスターの見方ですら、その両者の違いは明確になる。

活動家と釜ヶ崎労働者とが袂を分かつの、釜ヶ崎に来るにいたった経緯、あるいは原因の中にあるといえる。釜ヶ崎労働者にならなくとも良かった人間と、これからも釜ヶ崎労働者以外でありようがない人間とが、ポスターの前で選別される。

「俺たち釜ヶ崎労働者は……」とピラを切る時、複雑な思いを覚える。その複雑な思いが何なのか！そのことに對する解答を自分で見出すことが、これまでの僕の最も基本的な課題だったような気がする。

何故、釜ヶ崎へきたのか

釜ヶ崎へ来るようになってから、はや一年半が過ぎた。釜ヶ崎にきた当時の僕の課題は、ただ「釜ヶ崎を知る」ということであり、そ

れは好奇心にも似たものだった。明確な目的意識を持っていたわけではなかったが、釜ヶ崎を運動の場とすることを前提としていた。当時の個人的な状況を語れば、大学へいくことに白々しさを感じながらも、結局はいってしまつた自分自身に見切りをつけたかった。捨てざることで何かをえようと考えた僕は、捨てざることできそうな場所を選んだ。そういう意味で、釜ヶ崎はもっともふさわしい場所だった。しかし、どうしようもなく沈滞した状況の中で、「とにかく運動の場を」と釜ヶ崎にきたことは、ある意味で危険なことだった。

全く違った世界に、半ば盲目的に飛びこむことは、過去の自分自身がかかえていた問題性を忘れ去ることにつながっていたのだ。問題がきわめて顕在化し表面化しているここでは、現実の問題を整理し把握することにのみ目を奪われ、自分自身を問い直すことが忘れられてしまう。もっとも大切な問題であるはずの「何故釜ヶ崎へきたのか？」というところが置きざりにされたままになる。

釜ヶ崎へ来る以前に少しでも明らかにした自分の問題性と、来た後に見出した問題性とは、相互に関連し、培養し合うものでな

ければならない。そうでないなら、その移動は逃避になってしまう。そして、それがブツツリ途切れた形であるなら、その主体性は閉じられたまま、釜ヶ崎そのものに迎合、迎合してしまふことになるのではないか。昨日まで大学生であった人間のかかえた問題は、釜ヶ崎に持ち込むことでいっそう明らかになるだろうし、また、そうせねばならないのだ。

これまで僕は、一般論として釜ヶ崎問題を語りすぎていたようだ。底辺生活者の表面的なやさしさにのみ心を奪われ、評論家的な立場で釜ヶ崎労働者の代弁を好んでしてきたような気がするのである。

そういった僕自身の誤りは、釜ヶ崎との最初の具体的な関わりであるワークキャンプから始まっている。

それは、一般的なワークキャンプではなく「釜ヶ崎賃労働体験キャンプ」と呼ぶ方が適当なものだった。釜ヶ崎に身を置くことで、今までの生活を考え直し、新たな視点を獲得するという目的をもっていたはずのキャンプも、結局は、釜ヶ崎を体験すること以外の何ものでもなかった。一時的ドヤ暮らし、肉体労働という猟奇的な生活は、リクリエーション的な役割りさえ果たしたとも言える。

釜ヶ崎問題を真に共有できぬ者にとつては、常に自分が「差別者」であるということ前提にしておく必要があると思う。「差別」粉砕を叫ぶことで、「差別者」としての自分から逃がれることは不可能である。そして、センチメンタリズムで釜ヶ崎に寄りかかり、釜ヶ崎解放を唱和すること自体、「差別者」としての自分を放置することであるかもしれない。

*

七一年は釜ヶ崎がマスコミに注目された年であった。5月、6月そして9月と、「釜ヶ崎暴動」がきわめて大規模な形でおこつたのだ。しかし、そのことが忘れ去られた今でも「暴動」は終わっていない。今でもその主役であった彼らが裁かれている。

『被告ハ中学卒業後、来阪シ鉄工所等デ働イタガ長続キセズ、イワユル釜ヶ崎地区ノ簡易宿泊所ニ住ムヨウ・ナリ、土工トシテ働クヨウ・ナッタ』

こうした検事の差別的偏見の中で、労働者個々の釜ヶ崎にくるに至った経緯が暴露されていく。

洗面用具をひっさげ、つまり日常の生活空間から一時飛び出した形で釜ヶ崎にきたが故に、その問題を理解するには大きな限界があった。真の釜ヶ崎問題とは、〇・七平方キロという狭い地域に顕在化した表面的な問題そのものではなく、労働者個々人の釜ヶ崎にくるにいたつた経緯の中にこそあると思うからである。「日本資本主義の矛盾の集約点である釜ヶ崎は、階級社会のいっさいの汚物が集積、沈澱している。」などという時、その多くは、表面的な視点から語られており、労働者そのものをも「汚物」視してしまつていゝといえる。

差別する者、される者

釜ヶ崎で生活し始めた時、一つのことを思いしらされた。それは、釜ヶ崎が市民社会から背を向けられた存在であり、僕自身も背を向けていた人種の一員であつたことである。ホコリと汗にまみれ、汚れた地下足袋をはいた僕に対して、凍つた視線が向けられることに気付いたのである。タクシーは乗車拒否し、電車の中では、席があいていても隣りには座ろうとはしない。カチン／＼と頭に来る。

救済を担当する一人として、僕は何度も裁判所へ、拘留所へと足を運んだ。拘留所の面会室でぐうぜん僕と同年の労働者と向かい合つた時、彼が僕とはあまりにも違うことに驚ろかざるをえなかった。あまりにも老けた彼は、僕に頭を下げ、「ヨロシクオネガイシマス。」と小さな声でいった。僕は何とも言えぬ気持ちで「ハイ、ナントカ努力シマス。」と答えたものだ。

そういう労働者と向かい合う時、自分の存在そのものまでもが犯罪的に感じような、どうしようもなさがある。彼らの心情はどうい理解できえぬことを、まだまだ確認していないいせいであるうか。

コンプレックスの克服

社会問題化するような境遇に生まれた人間を羨望し、美化する風潮が少なからず活動家の間にある。それは、自分の問題として考える時、どうしてもコンプレックスという形をとつてしまふ。

釜ヶ崎をあげるまでもなく、底辺社会に生活する人達は、その境遇を軸として共同体的心情に生きている。そのことが表面に表われ

大学を出ていようが、頭が良からうが「差別」するためには、「自由労務」に従事しているらしい、ということでも充分なのだ。

釜ヶ崎にくる以前から、僕は一般的な差別問題がある程度理解しているつもりでいた。そして、「差別」理念を云々することを、「差別者」であることを逃がれる免罪符にしていたともいえる。不思議なことに、「差別者」である人間は、いったん自分が「被差別者」の立場におかれる中でさえも、安息を見い出そうとするものである。まだ息のあるアチブル性は、過去の経歴の中から自分を飾る材料を探し出そうとする。

例えば、大学へいったこと。下層社会に自ら進んで入り、その解放を志す活動家であること、つまり、一般の労働者とは違うことのいいわけを求める。

一時はそんな逆立ちしたヘエリート意識のようなものに、僕の行動は支えられていたと思う。自分自身のかかえた問題性を自身で解剖し、提出することは、もつともキビしさを要求されることもあり、避けてはならないものでもある。

人間の意識とはそう簡単に変革しうるものではない。それを釜ヶ崎は僕に教えた。

る時、同じ境遇を背負つた人間以外は「仲間」から除外されることがある。それは、彼らと具体的な関わりを持つとする時、しばしば起こるのだ。

ある屋外集会で久しぶりにマイクを握られ、なれぬ口調でアジっている時、あるハプニングが起つた。一人のオバハンがツカツカと僕の所につめより、何かはげしい調子でまくしたてたのだ。

「あんたは食える。でも、うちらは食うこともでんくのや！」

「食えるものにウチラのことがわかつてタルカ」という彼女の言葉は「仲間」と呼ばれることの拒否なのだ。

あとで聞いた話だが、彼女はプロの青カン（野宿者）グループの一人であるという。彼女は、「メシは食えずとも酒は飲める」、つまり五百円、千円のお金を肉体を提供する人間らしいということだ。運動することはぜいたくなことであり、運動できるものにそのことが本当に理解できない、という極限状況が釜ヶ崎にはあるのだ。

「仲間」から除外されることは、ここを運動の場としている活動家にとって致命的なことである。それを克服するには、自らのコン

ブレックスを克服しつつ、彼らと向かい合い、対話を求める以外にないといえる。それも、最終的には、〈仲間〉ではないと聞き直ることができて、なおかつ共通点を探す努力が必要だということである。だが、押しつけることこそ、避けねばならないこともある。

釜ヶ崎が失うもの

釜ヶ崎は、過去、すすんでやってきた者には何かを必ず与えた。そして、自からは何もかもえぬまま、むしろ失うことの方が多かったかも知れない。多くの人間が釜ヶ崎を通過することによってえられたものが、釜ヶ崎に還元されることは少なかったのだ。

そういった意味でも、釜ヶ崎での住民運動、労働者の組織化の運動は、勃興と崩壊のくり返しでしかなかった。しかもそれは、権力攻勢によるものでは決してなく、活動家自身の展望の喪失によるものであり、組織の自己壊滅によるものだったといえる。そして、労働者は組織の直接的な攻撃性へのみ期待をかけたその運動の観客や脇役以外のものではありうもなかった。負ければ出て行く、そういういたヨソ者活動家のお祭騒ぎ（かなりひどい表

現と思うが）が釜ヶ崎での運動であったといえよう。

昨年に引き続き今年も、労働者が無事に正月を越せるよう「越冬対策（注）この文は昨年の十二月に書かれたもの」が計画された。それは労働者同志が助け合う、つまり相互扶助の視点から労働者の参加をも募る形で行なわれようとしている。その「招請状」には、次のように書かれている。

「釜ヶ崎に今年も冬が来ます。現在社会の矛盾の集約点であるここでは、この資本主義社会が誇る『繁栄』とは裏腹に、人間が飢えと寒さにふるえながら死んで行くという現状があります。わずか〇・七平方キロメートルのゲットーのただけで、年間三〇〇名近くの労働者たちが、医者にかかることも出来なく、行路病死（いきだおれ）の名のもとに『現代医学進歩』のための解剖材料としてその屍を切りぎまれています。」

とくに、この現象は仕事が減少する年末年始に集中しているのです。

昨年、全港湾労組建設支部西成分会が中心になって、行政に対して年末年始の就労確保、緊急保護の完全実施を要求して闘っていきま

した。しかし受け入れられることなく、多数の個人、団体が参加のもとに釜ヶ崎越冬対策実行委員会を設け、自衛手段として医、食、住の問題にとりくみました。

今年の冬は全般的な不況を反映して昨年よりもきびしい事態が予測されます。そういう中で、越冬対策にとりくもうとする人が集まって準備にとりかかっています。私達は無責任な行政を許しはしませんし、また、単なる「人道主義者」になるつもりはありません。

私達実行委員会では、色々な思想、考えを持った人間の寄合い世帯です。そのような様々な人間が、お互いの違いを確認しながら、一致できる行動を決めました。それは人間として、あるいは仲間として、現実に死んで行く労働者を救うための行動なのです。

私達は、越冬対策をはじめとしたものでなく、陽気なお祭りにしようと思っています。」

その内容は、(1)青カン者（野宿者）発見のための深夜パトロール、(2)炊き出しを主とした食料援助、(3)ソフトボール大会、もちつき大会等行事を含んだ形でテント共同生活、(4)健康・法律相談、という幅の広いものであり、〈対策〉を〈対策〉に終わらせぬことを

主眼としている。そして、組織形態としては、自由な討論を保障する実行委員会方式が採られた。

準備もほどこされたある日、世話人の一人である僕の部屋に、一通の手紙が届けられていた。

「……皆さんはあらゆる思想の活動家であり、実際に色々やっておられます。釜ヶ崎の人達は革命など望みませんし、実際に革命が成功して、世界中が社会主義、共産主義になっても、ソ連や中国のように争いがたえません。そんな主義思想に、私は利用されるのががまんできません。」

「それでも、仲良くやっていきたい。」という彼は、手紙を書くまでは、共に街頭カンパに立っていた実行委のメンバーであり、「実体」としての釜ヶ崎労働者であった。前々から悩んでいたこともあったらしいが、その手紙を書く直接のきっかけは、「あるメンバーの一人が、『金をたくさん集めて発言権を強くもたねば』といったのを聞いて、悩みに悩んだことなのだ。『金をたくさん集めて……』ということの意味を含めて、彼をして根深い運動不信に走らせたものは、果して何であつたのだろうか。」

「私の主義思想はあなたを利用するものでは決してありません」といくら弁明したところで何の意味もない。

彼はまた、こういうことも言った。

「日チャンなんかはワシラを目覚めさせよう、させようと一生けんめいやってくれていることはヨウワかるんや。そやけど……」

彼の提起したものは、最も基本的なことであり、釜ヶ崎における既存の運動そのものを見抜いたものではないだろうか。

「ヨソ者」として

僕たち活動家は釜ヶ崎での異質な存在、つまり端的な言葉でいうなら「ヨソ者」であることをまず確認しておかねばならない。なぜなら、手紙を届けてくれた彼をはじめとする釜ヶ崎労働者が、無意識のうちに、「活動家と俺たちは違う」という前提を立てているからである。そして、事実、活動家と労働者の釜ヶ崎にくるにいたった経緯は本質的に異なっているのだ。

違うことを確認し、その前提に立ち、そこからの可能性を求める中でしか僕たちの運動はありようもない。活動家の基本的な姿勢と

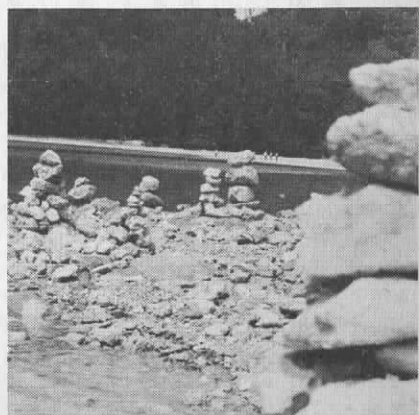
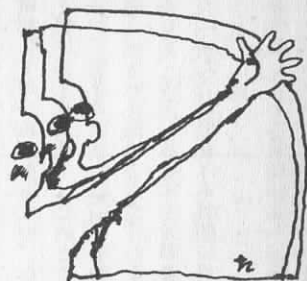
して、このことが忘れられ、あるいは無視されて来たと思ふのだ。

「世界革命から日本革命を規定し、そして釜ヶ崎を規定する。」——そういう視点から釜ヶ崎が語られることが多い。そこで欠落しているのは、自分が生まれ育った経緯、つまり「ヨソ者」が持っているはずの「ヨソ」での問題を抜きに釜ヶ崎を語っていることだ。

自分が存在する〈社会的位相〉のようなものを語らずして、語りうるものがあるとすれば、それは「一般論」でしかない。釜ヶ崎で語られねばならないのは、釜ヶ崎そのものではない。釜ヶ崎と比較しうる自分自身であり、そこから帰結する釜ヶ崎なのである。

「何故釜ヶ崎にきたのか?」「何故釜ヶ崎で運動するのか?」が自分自身の問題として問いつけられねばならない。そして、当然のこととして、その答えを釜ヶ崎労働者の前に提出せねばならないだろう。

自分の抱えた問題性を釜ヶ崎労働者に提出し、向かい合うことで、はじめて釜ヶ崎の問題性が共有できるのであり、「ヨソ者」の運動が可能となるのである。



■特集・〈中央〉から離れて

こぼれ落ちるのいいもんだ

おれの原点、未解放部落から、
都へむかつて愉快に笑いまする

『福岡県北九州市小倉区大字富野一、五二二番地、山のふもとこの地は、未解放部落と呼ばれるおれの出生地だ。』

で始まる詩劇を東京のキッドアトラック・ホールでやってからというもの、寒い日が続き

た。日吉の六畳一間のアパートで寒い寒いと言っているうちに、骨身にこたえてきた。

九月六日 朝

間奏曲がうるさい「浅川マキの世界」とい

吉田ミツオ

うレコードを廻わしていたら、旅に出る気になった。かもめ、かもめ笑っておくれ、青森へふらふら。

「そうめんと湖月堂の栗まんじゅうがたべたい。」と言って死んだ父ちゃんに会いたくなっ

て、津軽平野をあっちこっちとイタコ（注：神がかりになって死者や生者や神の霊を寄せる巫子）を尋ね歩いた。弘前で久渡寺の境内にイタコが出ていることを聞いた。ながいながい石段を登ってきたら、イタコが長数珠をならしていた。

なんとも哀切で低調なふしにのせてうたわれる祭文は、ヘビのようにのびてきておれの肉体を縛ってしまい、おれは呪文の渦中へまっ逆さま。

「ようもようもこんな遠方までたんねて来てくれたの、おれはうれしい。だがいまと違っては手にもぎれず顔もみることできぬ。おれもおまえと話がしとって、ずいぶんがまんしたが、運命が悪くてそれもかなわなんだ。おれは今のままで濡わらじをはいて、あっちやこっちと迷っていた。誰か呼んでくれぬかとところまちしていたが、おまえが呼んでくれたんで今からは成仏できる。おまえはきょうだいと睦まじゅうくらくれ。おれはこのありがたい久渡村でおちつくことができから心配は要らん」（イタコによる父の語り）

ジャラジャラ長数珠をならしては父の霊と交感しているらしいイタコは、時々しろ眼を

むきだしておれの方を覗きこんだ。お父ちゃんはやっぱり迷っていたか！

ビニールの手提げからりんごをとりだしてクルクルと掌でなでてかじるイタコに百円玉二枚を握らせ、石段の前まで来て天を仰ぐと津軽の空には雲がない。

九月八日 朝

恐山——地獄谷や賽の河原には小石が積まれ、明るい白黄色の風景の中を宇曾利湖のほとりまで硫黄の臭いがたち込めている。死んだ肉親に逢いに来たらしい女たちの後について、雨に濡れながら歩く。女たちは手に野の花と駄菓子を持って死者への手向けの唄をうたい、いかにも楽しそうに小石を拾っては積んだ。

「あいにくきたぞおー」

肉親との触れ合いに嬉々として声をあげたモンペをはいた女がいた。

それじゃあ、おれもひとつ積んでは父のため、ふたつ積んでは母のため、みつつ積んでは誰かさんのため、特に父のために多く積んだ。小心でもものの言えなかった父が、生前の屈辱から解き放たれて霊となったいまは、楽に飛翔できるように祈り、母と誰かさんのた

めには死んでも父のように迷い迷って苦しまないように。小さな地蔵がそこそこにあつて小石が積まれた土の下からは硫黄の臭いが鼻をつく。

突然、真紅の胸あてをした地蔵が霞のなかから出現してギョッ。子供たちが親の名を呼び賽の河原で泣き泣き小石を積むと鬼が出てそれを毀し、また泣き泣き積むという話は、ここに来て信じられる。雨を吸い霞を抱いて眠る宇曾利湖、硫黄と死臭が混沌として存在する恐山は、娑婆のイメーじとは別の世界に生きている。長靴を履き、手拭で頬拭りした女たちに恐山は染み、デイスカパー・ジャパンの観光客を恐山は拒否した。ああ恐い、人間的な恐山！

九月九日 朝

お父ちゃんの夢をみた。お父ちゃんは生きていて元気だ。いつものように家の土間に庭を敷いて切花を束ねている。お父ちゃんと言

「あいつは四歳だ、四歳だ。」

どうしてもあいつは四歳だって言ってきかないので、おれは怒って束ねられた花を蹴飛ばした。蹴飛ばされた花を見てお父ちゃんと

おれは大笑いする。なおも大笑いする。あいつは誰だかわからないが、二十歳になっていた。なぜ大笑いしたのか。笑ったあとが恐かった。

青森行きの急行十和田三号が水戸駅にさしかかった時、雨のむこうから「同期の桜」の男性合唱がきこえた。まるで戦時中の光景だ。といっても戦時中のこのような場面を見たわけではないが、車窓をおしてきこえる歌声は、時間の遡行のさまである。夜行列車は時間を逆にさかのぼる旅をやってみせてくれたんじゃないのか。昔の戦友が同窓生が集まって酒に酔い唄をうたって、旅立った友を送ったのであったろうが、とてもそうとは信じられない。あれは戦地に赴く友を涙をのんで送った暗い時代をどうしても感じさせる。戦地郷愁者の病める声なのだ。津軽のイタコとい、恐山とい、この同期の桜とい、ウソみtainな体験である。江ノ島電鉄のデンシヤが、家の軒や庭をかきわけるように突走るさまが、つげ義春の劇画のように……。

九月十日 朝

仏ヶ浦。巨岩は白く浸蝕されて、いまにも飛びたちそうに翼をひろげている。浦にあが

て今日もひっそり生きている。

『破戒』の丑松のように身元を明かしたとたん、その社会から抹殺される運命を恐れて生活しているおれの仲間たち。

「ニッコリ笑って、おれは部落者さ。」と言うがいいと全国の部落の仲間たちに呼びかけたい。だが、彼等の社会生活と引き替えにしてまで言わせる自信はない。でも、おれは言う。言えない仲間の分までおれは言う。

「わたし、生まれ育ちも未解放部落デス。」おれの父ちゃんも屠殺場で働いていた。父ちゃんが、よその家（部落の外の家）を尋ねてその家を出た後、その家では塩がまかれた。よその人との結婚を断られて首を括る女だっていた。おれがまだガキだったころ、学校からの帰り道で垣根のかげから石を投げつけられた。奴らは言った。

「エタツ、おまえらは臭い、あっちへ行け。」おれがなぜエタなのか、臭くもないのになぜ臭いとなぶられるのか、ガキのおれにはわからなかった。中学生の時、おれは色が悪くて陽気な女の子、鈴木さんに年賀状を書いたことがある。

「明けましておめでとーございます。今年もどうぞよろしく。」

ると、近くの漁民が観光客あいてに貝やおでんを岩のかけで商っていた。ひとつ十五円の生ウニがうまい。帰りの渡し船の中で、こまどり姉妹のテープがうたった。「しあわせになりた、しあわせになりた。」

晴着を身につけて笑顔をふりまいていたこまどり姉妹の土着性が、ふしぎに明るい津軽の海と空とがゆれることに侘びしくなっていた。こまどりさん、しあわせになつて。「おれもしあわせになりたい！」

十一月十八日 朝

あの唄をきいてから、しあわせになりたいしあわせになりたい、と希うようになった。奈良の大倭紫陽花邑——邑のある家の縁側に掛けていたら、ピタツと身につく。この感じはどこかで感じたことがあるなあと思いをめぐらしていたら、昔おれが生まれた部落の家の濡縁の感じであることを思い出した。池の端の道や畑への道を交う邑人の風情は、晩秋の慕わしい陽射とおおらかに溶け合ってよく似合う。法主さんの言われる「神ながら」とはこれであろうか。邑人たちの情の厚さはまだおれが子供だった頃の部落を思い出させる。いまや人の情なぞというのは未解放部落

ポストの前でハガキを読みかえして、ポケットの中にしまった。ハガキには住所が書いてあったので、おれが部落の者であることが知れてしまう。

幼馴染のゆきちゃんは、貧しい生活を嫌ってある夏の日にアメリカ兵に腕をまかせて部落を出て行ってしまった。

部落の仕事の主なもの、靴直し、人夫、行商、小作農などだが、最近では市役所の清掃局現業員の人たちがかなりいる。社会の汚物のなかに陥れられ、雨が降るとすぐ水浸しになる地理的悪条件の下に置かれている部落差別の枚挙にはいとまがない。「身元を隠して社会的な地位を確保した方が利巧だ」と忠告した先輩もいた。

おお、死ぬ前に「さむい」と書いたル・クレジオのお婆さんと思うがいい！

オドオドと生きるのもうやめた。おれは自然のなかの人間であるおまえを信頼する。部落の中には、お先真暗の恐ろしい怨念の渦が、乾いた笑いをふりまきながらころがっている。喜怒哀楽が直截で人間臭くてどうしようもなく気のいい半端者たちの群れ、たとえば、一人では生きてゆけないおタ婆さん。ああ、今は底抜けに笑いたい。笑っている

か。在日朝鮮人部落にだけしかみられないのじゃないか。と思うと、六年前、棄てたはずの部落への郷愁がにわかに湧いてきたが、この頃の部落は世相を反映して我利我欲が強くてせちがら、い、とは言え、「誰か故郷を思はざる。」

帰るに帰れぬおれだが、腹を据えて部落に詫びを入れてでも帰らねばなるまい。

部落差別の問題は現代には執拗に生きている、結婚とか就職とかにかんして特に著しい。問題は深刻である。この深刻な問題をそのまま深刻に扱うことは、おれには出来ない。学生運動家が街頭に立ってやるように、「差別することはよくないことです。今日から差別することはやめましょう」と叫んでみても、その言葉はむなしく空転を繰り返すばかり。

労働組合員が力づくでも差別をやめさせるのだと資本家につけあつて、その場は解決されたようにみえても、差別の意識は沈潜して別のところで巧妙に差別がなされ、結果はやすやすと彼等の欺瞞性にのせられてしまう。

「部落者！」と侮られるのを嫌って部落を棄てた青年は数限りなくいる。彼等はここじやないどこかを求めて（それは幻想にすぎない）日本のどこかの都会で、身元をおし隠し

うちに人間がなつかしくなつかしくて、どうしようもなくなつかしくて、気がついてみると抱きあっているおれとおまえ。あらゆるものから自由である人間たち。差別なんてじやまつて、する方もされる方もそれが不要なお荷物だつてことが笑うと解る。

おれはいま部落の中に「生活共同体」をつくらうとしている。まずおれたちの意識革命を。部落と一般社会との間にある見えない境界を切り崩す作業をじみちにやろう。野外であるいは土間で筵を敷いて座をつくり笑える芝居を観客と共に創りだす……。

日本の高度経済成長はますますおれたちを切り捨ててゆく。おれたちはそこから遠くへはじきとばされ、こぼれ落ちて生きている。それならば、いつそのこと、ニッカリ笑ってこぼれましよう。こぼれ落ちるのもいいもんだ。そこには慕わしい仲間がいる。おれの原点、未解放部落から都へむかって愉快に笑います。

革命は解放に通ずるか

秋山三喜雄

人間には常套的なもの、恒常的なもの、変化に乏しいものは好ましいものではない。身心的に激動の過程にある青年期ではなおさることである。革命は異常事である。青年が老壮年よりはるかに激しい興味を革命に覚えるのは、けだし当然といわねばなるまい。

この数年来、否、戦後ずっと引き続いて、青年は革命への関心を燃やしてきた。ある有名な社会科学者の予想に反して、革命に関して熱情をかき立てられるものは、プロレタリアをしのいで、教育関係者、学生らの知識層に属する青年においてとりわけ著しい。

筆者もまた例外ではなかった。明治末期に生まれた筆者には、今日ほとんどすべての青年を魅了している思想、いわゆる科学的社會主義とは全く異なる、それでいて當時を風靡していた革命思想に大いに動かされた。しかし、それは世界史上のいくつかの大事件や、国内の大変動に採まれて、随分変わったものになった。他人からは、単なる年齢のもたらした、ありふれた変化にすぎないと見えるか

もしれないものに到達したのであるが、己れ自身の内部では、それは単なる妥協や後退としてではなく、生長としてであった。それはとにかく、《革命》はもはや希望のかけられる手段ではなくなった。否、むしろそれは解放への妨害にはかならずぬものと化したのだ。

歴史時代に入ってから人類は、ほとんどすべて国家的形態の中で生活している。ポリス的なものから近代国家に至るまで、権力によって統一された社会に住んでいる。それ故、社会成員の不満の解消は、常に一国内に起こる変革に俟った。ある場合は、微温的で、緩慢で、皮層的なものであり、ある場合は、深刻で、急激で、徹底的なものもあったが、前者は普通改革と呼ばれ、後者は革命と呼ばれた。ただし一九一七年のロシアに起こった革命以前のものは、表面如何に徹底的にみえようとも、これはせいぜい支配者の更迭で終わった。その故にそれは政治革命だった。ロシアの革命こそは革命の名に値する真の革命、

いわゆる社会革命であったと人々は信じた。だが、それから五十余年を経た今日、人々はそれがやはり一種の政治革命でしかなかったのに気付かねばならなかった。

第二次世界大戦後に、中国で行なわれた革命は、ソ連と同じくマルクス・レーニン主義を旗印とし、ソ連を超えることで社会革命の実を挙げようと焦っている。すでに四半世紀を経過した今日、徐々にその実態を露わにし始めているが、それは依然として前車の轍を踏む以外の如何なるものでもないことを瞭らかにしつつあるだけではないか。

それでもなお、青年たちは酔わされたものの如く、それらを謳歌してやまない。革命はかくも魅力に富む何かなのである。だが、もはや革命はそれの限界を人類の眼前に露呈し尽した。それはせいぜい支配体制の純化を、あるいは強化を結果するにすぎない。いわば「庸物の万能者」だったことを示した。人類の希求する願望「解放」は依然としてわれらの前方にそびえ立って接近をゆるさない。

革命は当面する社会体制への闘争である。当面の体制の瓦解だけを目的とする破壊活動であるならば、それは一応満足する結果を擱

めるだろう。だが、当面する体制が権力を中核とする体制、すなわち国家である時、権力の掌握者の打倒は決して権力の消滅とはならない。権力の対象は雲散霧消するのではなくてそのまま残るのであるから、新規の権力者が登場しなければこの劇は完結しないのである。アナキが嫌われるのはこの事を語るものなのである。ここで希求せられる秩序は、国家体制のほかのものでは断じてない。

そこで、この闘争を、国家を求めない、つまり自由の反対概念である権力を排撃することとを究極の目標としている人たちの立場、換言すれば解放をこそ目的としている人たちの立場からした時、革命はどのような反応を呈するであろうか考えよう。

彼等は同じ手段を用いて全く反対の結果を予想しているのであるが、まず革命闘争において勝利することが最も優先しなければならぬとしている点では共通している。そこで仮りに彼等が勝利者となった時、彼等は当面する事象にいかに対処するであろう。

彼等のある者は、民衆の本能的自己処理の能力に依拠すればよいとしている。権力主義者の如く、先頭に立って民衆のゆくべき方向を決定し、そこへ向かわせようとはしないの

はわかる。彼等は自ら民衆のうちに溶けこんで、民衆と全く一体になって動くことと決意しているし、そのように行動しようとするであろう。けれども民衆はそれまでの社会の諸慣習の凝固体でしかないで、自主的でまとまった賢明な途を選ぶことができない。彼らは指導者が欲しいのである。自立でなければ決して達し得ないものを他立に依って達しようとする安易ではあるが、用いてはならない途しか選ぶ術を知らないのである。その時を虎視眈眈の至るを待っていた旧体制の残存者が、好機逸すべからずと割り込んでくる。それを避けるためには、権力を欲せず、それを打倒消滅させるために粉骨砕身してきた、新体制建設の旗手自らが心ならずも乗り出さざるを得なくなる。かくしてミイラ取りはついにミイラに化してしまうのである。ゲニエル・ゲランが語るスペイン内乱におけるアナキストの演じた茶番劇が現出するのである。

革命は、自由な社会への地均しができた上で起こるものではない。反自由の環境の真只中で起きるのである。しかも戦闘はティピカルな権力体制のヒナ型である軍隊——たとえゲリラであろうとも——によって行なわれるほかはない。権力体制を用いて、反権力体制

の効果だけを願っても、それはしないものねだりの類から脱するわけにはいかない。

では、解放へ達する途はないのか。ないとはいえない。少なくともそのひとつの途は、契約によるゲマインシャフト的社会の建設運動である。今や澎湃として起きてきた共同体運動のあるものはこの類のものであると私は考えている。この運動の究極的に志向するのは、地球的規模による人類の解放であろうが、その途は遙かなる地平に連なっている。百年や二百年で成るものではない。徐々に、少しづつ、音もなく静かに、それでいて絶え間なく伸長する、不断の努力の積み重ねが求められるものであろう。はいり易く、達し難い困難の途である。

今日の「文明」とちやうど反対の方向へ進む別個の文明であらねばならない。ジンギスカンやアレキサンダーや秦の始皇帝やローマの歴代の皇帝やスターリンや毛沢東の帝国や近代国家でもない。否、矮小国家でさえもない。それは、小さい小さい真に住民各人が、かけねなしの社会の主人である、直接民主主義の、平等で自由な人間の創り出す文明こそ望まれるものであろう。(筆者は札幌在住)